

アクティブな犬

脚本・井上篠介

登場人物

長男・・・喪服

義兄弟・・・喪服

次男・・・喪服

明転。舞台奥に父の遺体。その横に遺影。長男が葬儀屋と電話をしている。義兄弟が犬をめでのいる。次男は椅子に座つてみている。

長男「あー、もしもし。はい。そうです。坊さんも帰りました。はい。お昼読んでましたね。このたびはよろしくお願ひいたします。ええつと五時ごろです。あとの時間後、分かりました。はい。車はありますのでそれでふもとの葬儀場まで行きたいと思います。ええ。ええ」

義兄弟「あーちよつと。可愛いねえ！ え！ 何！ 白いね！ 白い手もつふもつふだね！ ね！ 何！ ツインテールみたいな耳して、超可愛いね！ オス？ メス？ メス！ 名前なんて言うの！？ 名前なんて言うの？」

長男「あ、ちよつとすみませんね。すみません。すみません」

義兄弟「あ、はー」

長男「ちよつと(静か)」

義兄弟「ああ、あああ。すみませんと言いながら静かに犬と遊ぶ」

長男「いや、あ、すみません。大丈夫です。そちらも急なのに対応してくださつてすみませんね。年寄がこんなヘンピな場所で一人で住むんじゃないよつて話ですよ。定年退職したら山奥に家賣うんだーつて言つて。こんなデザイナーズみたいな家建てて。車運転できなくなつたら死んじゃうでしょつてねえ。いえいえ。本当にですよ」

義兄弟「あ」

長男「お、あ、ちよつとあ、ちよつとすぐつたいな。あ、すみません。実は犬がいます。ええ。すげえちよこまかちよこまか動くんですよ。ええ」

義兄弟「こら、ダメでしょワンちゃん。電話してるんだから。よく見て。分かるでしょ。電話してるの。ね？」

長男「はい。ではお待ちしております。あれ、あれですかね。お通夜つてあれいりますか。数珠？」

義兄弟「ほら、話してるんだから。ね。吠えないの。ほら！」

長男「あ、ある人は、分かりました。ありがとうございます。はい。ではお待ちしております。はい。よろしくお願ひします。はい。はー」

義兄弟「あーほらほら、あーほらほら白いモフモフ！ 顔が白くてモフモフしてるね！ ほら！ よーしよ。あ」

しばし無音の後、遺影が倒れる。

義兄弟「ちよつとワンちゃんダメでしょ」

長男「なんだよこの犬。親父が飼つたのか？」

次男「親父が飼つたんだよ。ちよつと一年前」

長男「あの犬嫌いの親父がか」

次男「うん。母さん死んで寂しかったんじゃない。俺も本州の大学行って全寮美家帰つてなかったから分からな(げん)」

長男「ヒロタロウ、もう大学生なのか」

次男「うん。大学三年生」

長男「そつか。親父と喧嘩して家飛び出してそれっきりだからな。お前あの頃はチン毛も生えてないくらい小っちゃかったのに」

次男「だって俺6歳とかでしょ」

長男「あの時はヒロコもまだ中学生とかだったよな。金髪の黒ギャルだったあいつがこんな。ねえ、旦那さん見つけてもう一児の母ですか。ほえー」

義兄弟「ありやー可愛いね！キスしてやろうか。キスしてやろうか！ヌハ！」

犬「・・・」

長男「・・・」

次男「・・・まあ、でも、凄い大手の商社マンですからね。アツノリさん」

義兄弟「ブハア！ああすみませんはしゃいでしまつて。実は僕無類の大好きでして」

長男「あ、そうなんすか。いや、全然いいですよ」

義兄弟「すみません。お義父さんが亡くなったといつのに、こんなお義父さんの遺体の前ではしゃいでしまつて」

長男「いえいえ。きつと父も喜みますよ。分かりませんが・・・なう」

次男「さあ・・・」

義兄弟「・・・」

次男「・・・」

長男「あ、葬儀屋さんんだけど17時にここに来て親父回収して葬儀場持って行ったつて。で、20時からお通夜」

義兄弟「あ、そつですか」

長男「ここから葬儀場まで二時間くらいかかるみたいだから葬儀屋さんが行ったら我々も向かいますよ」

義兄弟「あ、それでしたつ今、ヒロコとうちの子どもが親戚の方向名かと一緒にふもとの回廊まわりにいるみたいなんですけど、その時回収する感かんでいいでしょうかね？」

長男「いいんじゃないですか？こんな山奥まで一回戻つて来るのも面倒くさいでしょう」

義兄弟「ではそのように伝えておきますね挨拶を出す」

長男「・・・」

次男「・・・」

長男「お、なんだ。どつした。お、なんだ。なんで顔を舐めるんだ。喪服が毛まみれだ。ちよつと、ちよつと。うわあー」

義兄弟「あ、ヒロコ？うん。アツノリ。アツノリ。お義父さんのお通夜の会場に向かうときヒロコたちも回収するから、近くのイオンとかジャスコとかマックスバリュとか、なんかそこらへんで時間つぶして。うん。多分18時から19時くらいになるんじゃないかな。うん。はいはい」

長男「あ、いつちやつた」

しばし間

義兄弟「しかしあれですね。可愛いらしい犬ですね」

次男「はい。そうですね」

長男「俺、あんまり動物って食わず嫌いって言うか、触れ合ってこなかったんだけど、やっぱこう見ると可愛いもんだね。目が凄く純真無垢」

義兄弟「動物っていいですよ。すっごく無邪気っていうか心が綺麗っていうか」

長男「心綺麗かい？」

義兄弟「動物って絶対悪くないじゃないですか。だから僕、犬とか猫とか死ぬ映画、無条件でダメなんです」

長男「あ。よくホラー映画とかサイコサスペンスみたいなのやって、恐怖の予兆として犬猫が冒頭で無残に殺されたりするもんね」

義兄弟「そんな冒頭の映画もう嫌いですよ。あと絆系っていうんですか？絆系の犬の映画も僕ダメなんですよ」

長男「絆系って淡い草原みたいなパッケージでよく柴犬とか写ってるやつ？」

義兄弟「そうです。ああいうのって最後死ぬじゃないですか。ワンちゃん」

長男「まあね」

義兄弟「あれって作者が観客を泣かせるために一度その最高のタイミングでワンちゃんを殺してるってことじゃないですか。老衰とか、車に撥ねられたりとかで。それって僕、動物に対する冒瀆だと思うんですよ。これって僕だけですかね？全人類人間が死ぬ分には平気なんですけど」

長男「あー確かに分からなくもないね。遺体の前でする話ではないかもしれないけど」

義兄弟「だから僕、絶対そういう映画見ないようにしてるんですね」

長男「はあ」

義兄弟「でも俺、多分ですけど、そういう映画、きつと見たら泣いちゃうんですよ」

長男「はー」

次男「まあ、悲しいですけどもね」

義兄弟「それがまた、悔しくて」

長男「この犬、犬種とかってなんなんだろう？」

義兄弟「あーどうなんですかね？確かになんか全寮なんだか分からない」

次男「実は僕、親父から訊いたんですけど」

義兄弟「今？」

次男「あ、いや、生前電話で」

義兄弟「あ、ああ。びっくりした。てっきりシヤーマンの素質をお持ち合わせかと」

次男「だから僕を知らないんですけど、なんだと思います？」

長男「ドーベルマン？」

義兄弟「なわけないでしょう！ドーベルマンこんなでつかな犬ですよ！なんだろう。トイプードルみたいな要素もありながらちよつと違うしな」

次男「あ、でもそれ、惜しいです」

義兄弟「惜しい？」

次男 「実はこれ、パピプーっていう犬種なんですよ」

長男 「パピプー?」

義兄弟 「パピプー!」

次男 「ええ。パピヨンとトイプードルを掛け合わせて生まれたので、パピプーっていうんですよ」

長男 「はー」

義兄弟 「へーそんなのあるんですね」

次男 「他にもチワワとミニチュアダックスフンドを掛け合わせてチワックスとか、パグとブルドッグを掛け合わせて、パグブルとかもいるみたいですよ」

長男 「へーそう」

義兄弟 「いやーへえ」

長男 「凄く人間のエゴな感じが凄いな」

義兄弟 「だとしたら、もし、パピプーとパグブルを掛け合わせたら何になるんですか?」

次男 「あ、いや・・・さあ」

長男 「パグピ、パグピプーブルみたいな感じがな」

義兄弟 「あ、でしたらもし、それにチワックス掛け合わせたら、どうでしょうか」

長男 「チワ、パグピ、プーグ、プーブルックスみたいな」

義兄弟 「なるほど。では、それにドーベルマンを掛け合わせたら」

長男 「ドー、チワパグピプーブルックスマンみたいな」

義兄弟 「てことはそれに」

次男 「もうやめましょ、どんどん化け物みたいな犬が出来てきてしまいそうです」

長男 「いやもう雑種だね」

義兄弟 「お、来た。ほーれよちよち。でも凄いですね。こゝろ、可愛いと可愛いを掛け合わせるものつそい可愛いが出来るんですねえ」

長男 「そうっすねー。パピプーか。おい! パピプー! ちょっとパピプー! 可愛いなおい! パピプー!」

義兄弟 「お義さんはこのパピプーちゃんに名前とかつけてたんですか?」

長男 「あ、そっか。パピプーって犬種だもんね。おい、ジャパニーズピーパーみたいなものだもんね」

次男 「多分、『豊丸』だと思います」

長男 「豊丸?」

次男 「犬の檻にそう書いてあったから、多分豊丸かと」

長男 「豊丸ってなんだ、船みてえな名前だな」

次男 「何が由来なんだろう。何か父さん好きだったものあったかなあ」

長男 「豊丸、豊丸、豊丸」

義兄弟 「セクシー女優じゃないですか?」

長男 「次男「・・・」」

義兄弟 「・・・」

長男 「次男「・・・」」

長男「セクシー女優？」

義兄弟「知らないですか？ 確か30年前くらいに活躍されていた方で、それまでって受け身が主流だったんですけど、『豊丸』さんは、自らが感得まくら積極的に男を求めることで一世を風靡したという。ほらお義父さんの年齢的にもちよつとぴったしかと」

長男「……」

次男「……」

義兄弟「……」

長男「あ、こら。パピプー、そんなところでおしつこいをしてちゃ駄目だ」

次男「ああ、いいよ。やるよ」

義兄弟「……」

次男「……」

長男「……。なんか他の名前つけるか。この二人で」

義兄弟「確かにそれがいいかもしれませんがね」

長男「この豊丸にもね。パピプーの豊丸にとつてもね。きっと改名した方がいいと思つたら」

義兄弟「呼ぶたびに微妙な気持ちになりそうですわね」

長男「あれ、そういえばあんたんとこのお父さん？ 俺の甥っ子にあたるのか。名前なんて言うの？」

義兄弟「うちの子どもですか？ ミヤビです」

長男「ほえーミヤビ」

義兄弟「優雅の雅と書いてミヤビ。美しく、そして可愛らしく、幸せに育つてほしいという願いからそう名付けました」

長男「ほえー」

次男「素敵ですね」

義兄弟「なんか、この豊丸にも可愛らしい名前をつけてあげたいですね」

次男「そうですね」

長男「地獄坂オタルなんてどうだろう」

義兄弟「却下です。ハナちゃんなんてどうでしょう」

次男「あ、いいんじゃないですか？ 見た目にもあつてる」

長男「そつか。じゃあハナちゃんにするか」

義兄弟「あ、ほれ、ハナちゃん。よしよしよ。よしよしよ。よしよしよしよ」

長男「しかし外雪すげえなあ」

次男「どんどん強くなってきてるね」

義兄弟「こりゃー結構な雪ですね。大丈夫ですかね。葬儀屋さん」

長男「まー大丈夫ですよ。これくらいでいちいち来れなくなつたら」

擔帯が鳴る。

長男「なんて話したら葬儀屋さんだ。(携帯に出る)もしも。はい。あ、そうですーあ、はい。あえ、そうですか？ あ、はい。はい。はい」

義兄弟「・・・やっぱりお義父さんが亡くなったっていうのはショックかい？」

次男「そうですねー。でも、まだあまり実感も湧いてないっていうか」

義兄弟「そっかー。急だったもんね」

次男「僕も、本州の大学、まあ本州って言っても弘前大学なんですけど」

義兄弟「青森ね」

次男「ええ。大学入ってからずっと一人暮らしで全然父親にも連絡してなくて。まあ、結構酔いつてからの子どもだから、逆に介護とかで大変になる前に死んでくれて良かったのかもなーなんて」

義兄弟「そっねー。そういう問題もあるもんね」

次男「ええ。だからなんか、なんかですね」

義兄弟「何か困ったことあったら、僕も力になるから。一応ほら、ヒロタロウ君は僕の弟ってことになるから。お兄ちゃんだから」

次男「お兄ちゃん、ですか」

義兄弟「お、いいね。そういうの。実は俺弟いないからちよつとさう懂れてて。そついうのに」

次男「そつなんですか」

義兄弟「なんか照れるな。だからほら。いつでも相談とかしてちよつだいな」

次男「ありがとうございます」

長男「電話切るあ、葬儀屋さんだけ雪で今日来れないって」

次男「えー」

義兄弟「あ、へえーあ、そつですか」

長男「仮通夜って知ってる」

義兄弟「仮通夜ですか」

次男「いや、あんまり」

長男「最近減ってるらしいんだけど、遺体とさう近しい親類だけで最後の夜を家で過す、みたいなのを仮通夜って言うんだって。だから仮通夜プランってことでー！ っつ」

次男「・・・はあ」

長男「仮通夜！ 仮通夜！ っつめつちや仮通夜って言つてたわ」

義兄弟「てなつてくるとヒロコ達も戻つて来るのきつい感じですかね」

長男「どつだろ。車何」

義兄弟「プリウスです」

長男「あー、でも訊いても分からんね。プリウスと霊柩車どちの方が雪道穿る馬力あるんだろ」

次男「まず霊柩車が未知数だからね」

義兄弟「ちよつとヒロコに電話してみますわ電話をかけるあ、もしても、ヒロコっ、今そつちの様さどっ・・・」

長男「な、おい。おい」

次男「何っ」

長男「ハナちゃん どうですか？」

次男「どうですか？」

長男「誰かが引き取らなきゃいけないって？」

次男「あー」

長男「お前は学生だろ？ 俺は大きな声じゃ言えないけどフリーターだからさ。飼うのはあんまりきついだろ」

次男「確かに」

長男「保健所つてももう気持ち的にしたくない訳じゃん。気持ち的にっていうか、モラル的にっていうか。親父が可愛かったた犬な訳だし。まあどうい風にも可愛かったのかは知らんけど」

次男「そうね」

長男「・・・てなると」

次男「・・・」

義兄弟「いやー俺は全羨ましいよ。ずっとお義父さんが飼ってた犬と遊んでる。知ってる？ 犬種 パピプーだつて。パピプー。パピヨンとトイプードルを掛け合わせたらしくて。パピプー。さっきお義さんとヒロタロウ君と名前もつけてあげただけだよ」

長男「・・・まあ、お願いするしかないよな」

次男「そうだね」

義兄弟「じゃあ、民泊とか旅館とか適当なの見つけて泊まってきたよ。遭難しても困るしね。ミヤビも民泊とか楽しいだろ。きつと。あ、カード使えるかだけ先に確認しててね。うん。じゃ、また明日。ばいばい」

義兄弟「あ、ヒロコ達も戻って来るのはちよつと厳しそうなので、今日はふもとの適当な旅館とかに泊まることでした」

長男「あ、そう」

次男「アツノリ・・・兄さん。お願いがあるんだけど」

義兄弟「ん？ どうしたの？」

次男「ハナちゃんだけだよ、アツノリさんのところで飼ってくれないかな？」

義兄弟「ん？」

次男「兄さん」

長男「いやもうこれはお願いなんだけどさ。俺はアレでこいつは学生だから、ちよつと大飼うのは厳しいわけよ。全羨飼ったことないし。だから、ちよつとお願いできないかなって」

義兄弟「あー、こいです」

長男「あ、本当？」

義兄弟「実はずっと犬は飼いたいなって思ってたよ。ほら、よく言うじゃないですか。子どもが生まれたら犬を飼いなさって。赤ちゃんの頃は守ってくれて、幼少期は良き遊び相手に、少年期は良き理解者となつてくれて、子どもが青年になった時は、死んであつて。死を持ってというのは死ぬ前提みたいで嫌です。うちの子どもももう五歳ですけど、こいついう機会でもなければ犬って飼ったりしないかなって。何よりこのハナちゃん無茶苦茶可愛いです」

長男「ああ良かった。ではすみません。お願いします」

義兄弟「いえいえ。こちらこそすみません。よろしくお願いたします」

長男「じゃあどうします？ 今日はこの男二人だけみたいですし。お酒でも飲みますか」

義兄弟「お、いいですね。ヒロタロウ君はお酒飲めるの？」

次男「まあ、こつたしなむ程度には」

長男「親父も、なんかこう盛り上がったたらきつと嬉しいでしょ！ 知らんけど」

次男「結構いい日本酒みたいの裏にあつたよ」

長男「お、まじか」

次男「あ、でもいいのかな。父さんが大切にしてたやつか」

長男「いやー良い良い。死んじゃつてんだから。そついうのつて飲んで初めて日本酒なんだから。飲む方がいいんだよ」

次男「・・・そつかー！」

長男「ほら、アツノリ君もね。色々ヒロコとのことか聞きたいです」

義兄弟「初めての夜のことでかですか？」

次男「いや、それは・・・」

長男「ちよつとまだなアツノリ君。もう酔ってるのかい？ ハハハハハ」

素敵な音楽と共に暗転。

明転。

長男「あのー、なかなか申し上げにくいんですけど。パピプーがですね。我々が寝ている間に、あの、父の遺体を、結構食つてしまつてて」

義兄弟「はー？」

長男「朝皆より先に起きてこつ。パピプーの口がこつ赤くジョーカーみたいになってましてですね！ ジョーカーみたいだな！ つてなつてたら何か転がつてまして。何かなつて思つてよく見たら鼻ぐ、父の鼻を転がしてまして。皮肉なことハナちゃんが鼻を転がすーなんて言いますか」

義兄弟「・・・え」

次男「じゃあ父さんは」

長男「見ない方がいい。今、ゾンビよりもゾンビみたいになつてるから」

義兄弟「・・・」

次男「・・・」

長男「シートは、シートは替えた。パピプーの口も頑張つて拭いてうつすらジョーカーくらいにはなつたから」

義兄弟「・・・」

次男「・・・」

長男「まあ、焼けば！ 焼けば遺体は骨になるから！ それまでの、あれだから」

義兄弟「・・・」

次男「・・・」

長男「…なんだよ！ 俺が食ったわけじゃないんだから！ パピプーが！ パピプーが遺体を食べたんだよ！」
次男「…まあ、そっだけだよ」

義兄弟「あ、こら、ちよつとパピプー、辞める。顔を舐めろな。辞める」

長男「葬儀屋さんにはさっき電話して事情を話したり、たまごめん話だからまあ、対応しますとは言われたけど、どつて目を離すんですか？ 怒られたよ」

次男「…そつなんだ」

長男「別に俺が食ったわけじゃねえのに」

次男「…そつね」

義兄弟「…」

次男「…」

長男「…。。とびついでで、パピプーをまろしくお願いします」

義兄弟「いやー！ ちよつと待って！ パピプーはうちで飼うんですか？ いや、ちよつと待ってくださいー！」

長男「いや、でも昨日」

義兄弟「いやいや。いやいやいやいやいや。いやいやいやいやいやええー」

長男「でも、動物がお好きって」

次男「言った言った」

義兄弟「いや、いやいやでも、お義父さんを食へられた訳ですよ？ パピプーは」

長男「まあ、パピプーってどうかハナちゃんね」

義兄弟「いや、でも、すみません、ちよつと俺、ヒロコのお義父さんを、食べた、パピプー、ハナちゃん、パピプー、愛せる自信が」

次男「いや、でもほら、子どものためにも犬を飼いたいって」

義兄弟「いや、言いましたけど、いや、いやいやいや」

長男「でも、パピプーに悪気は」

義兄弟「いや、こはもうはっき言いましょう。義理のお義父さんを食べたパピプーは、子どもに、ミヤビに悪影響を与える気が…」

長男「えー、なんで？」

義兄弟「例えですよ！ 例えは我が家でこのパピプーを飼ったとしましょう！ もしひよんなことからミヤビがこのパピプーの正体を知ってしまったらどうしますか。パピプーは、ハナちゃんはお野ちゃんを食べたんだ！ ハナちゃんは、お野ちゃんの鼻を転がしていたからハナちゃんなんだ。そんなとあつてはならぬでしょう！」

次男「お兄ちゃん、名付けの時系列が無茶苦茶だよ」

義兄弟「うるせえ、もしそんなことがあつたら、ミヤビは、どんな心の傷を負うか。その心の闇は、やがて大きくなり、沢山の人を殺めてしまつかもしれません！」

長男「言わなきゃいいんじゃない？」

義兄弟「そついう問題じゃないでしょ！ 大体俺だって頭がおかしくなりそつだ。パピプーが娘の顔を舐めてい

る時、どんな顔で見たいはいいんですか。お義父さんの遺体を食べたその口で、娘の、ミヤビの顔を舐めてい

る時、私はどんな顔をしていれはいいんですか！」

長男「言わなきゃいいんじゃない？」

義兄弟「そついう問題じゃないでしょ！ 大体俺だって頭がおかしくなりそつだ。パピプーが娘の顔を舐めてい

る時、どんな顔で見たいはいいんですか。お義父さんの遺体を食べたその口で、娘の、ミヤビの顔を舐めてい

る時、私はどんな顔をしていれはいいんですか！」

長男「言わなきゃいいんじゃない？」

義兄弟「そついう問題じゃないでしょ！ 大体俺だって頭がおかしくなりそつだ。パピプーが娘の顔を舐めてい

る時、どんな顔で見たいはいいんですか。お義父さんの遺体を食べたその口で、娘の、ミヤビの顔を舐めてい

る時、私はどんな顔をしていれはいいんですか！」

長男「いやーでも」

義兄弟「思っちゃいますよ。どんなに優しくしつとりと舐めていても、次はシヤビを食べるんじゃないかなって。パピプーはシヤビのこを食べたいよ、思っているんじゃないかなって。そんなパピプーに対して父親である私は・・・正気を保ち続けられるか・・・」

長男「葬儀屋さん曰く、ペットがこう遺体を食べちゃうのって愛情表現の一種らしいですよ。反応が無くてそういつているうちに遺体をやこんでん・・・みたいな」

義兄弟「愛情表現、愛情表現ですか！ ちよつと遺体を見せてください！ こんなのは、愛情表現から途中で食欲にシフトしちゃってるじゃないですか！ しかも、鼻を取って転がして遊んでいるなんて、サイコパスでもそんなことないですよー」

長男「いやいやいやいや」

次男「でも、兄さん、動物はみんな心が綺麗って」

義兄弟「言ったよ。確かに動物は心が綺麗だ。だからこそころしいのだよ。心が綺麗ゆえの恐ろしさなのだよ」

次男「はあ・・・」

長男「じゃあどうします？ ハナちゃん」

次男「そうですね。僕たちはちよつと厳しいです」

義兄弟「じゃー保健所じゃないですか」

長男「えーいやいやいやいや。それはダメですよ。可哀想ですよ」

次男「昨日まであんなに動物愛護な感じだったのに」

長男「本当だよ。偽善か？」

義兄弟「偽善。じゃあどうすればいいんですか」

次男「顔をよく見てください。可愛いですよ。昨日さんさんキスしてたじゃないですか」

義兄弟「可愛い顔なのが逆に怖いよ。パグみたいな顔してた方がまだ行動が理解できるわ」

長男「アツノリ君。君は変わったばかりだよ」

義兄弟「昨日会ったばかりですよ」

次男「兄さん。お願い」

義兄弟「一度と俺のこと兄さんと呼ぶな」

次男「ああ・・・ああ・・・」

長男「ヒロコはなんて恐ろしい男と結婚してしまったんだ」

義兄弟「もつこれはしょうがないですって。保健所に連れて行きましょう」

長男「いや、でも・・・」

次男「でも、父さんを食べたってことはもつパピプーはお父さんと言っても過言じゃないよね？」

義兄弟「はあっ」

長男「こいつヒロタロウ！ 何をどち狂ったこと言ってるんだ」

次男「だつてお父さんを食へたんですよ。だとしたらもつパピプーが父さんだよ。パピプー父さん！ 父さん！

ごめんよ。全然帰って来れなくて、最後に会ったときも全然、大した会話も出来なくて」

長男「パピプーめっちゃ逃げてる」

次男「パピ、プー……」

義兄弟「じゃあ、ヒロタロウ君が飼えばいいじゃない」

次男「それは無理だよ。来年は就活の時期だし、休みの期間は可能性を信じて色々な場所に行ってみたいと考えているんだ。海外とか。インターンだって給料が出る訳じゃないし。何よりこの将来を決める大切な時期を犬で棒に振るわけには行かないよ」

長男「犬で棒にか」

義兄弟「そっか……。結構ヒロタロウ君は冷静なんだな」

次男「兄さんは？ 兄さんはどうなの？」

長男「……俺？」

義兄弟「なんでお義さんは飼えないんですたっけ。犬」

長男「俺は、ほら、フリーターだから」

義兄弟「フリーター。なんで」

長男「なんでって。なんか成行きで大学辞めて、色々縛られたくないなとか本当の自分を探すーみたいな」

義兄弟「見分かりましたか？ 本当の自分」

長男「え？ まあ、見つかっちゃったっていうか、見つかっちゃったと思ったらなんか違ったっていうか」

次男「兄さん。俺（こ）んなこと19年ぶりに会った兄さんに言うのもあれだけど、勝手すぎるよ。自由過ぎるよ。父さんだつてずっと言ってたよ。あいつはバカだつて。バカだけど、何かしらの才能はあると思っからきつとてのうち何かしらの何かになるはずだつて。でもいつまでたつてもそんな話は訊かなくて。ヒロコ姉ちゃんだつて、兄ちゃんがそんな感じだから、私が稼げるようにならなきゃいけないんだけど私は全寮勉強出来ないから金持つてそんな適当な男捕まえるしかないって」

義兄弟「そっだったんだ」

次男「俺だつて！ みんながそう言ってるから、きつと全然覚えてないから分からないけど兄ちゃんつて凄く何かしらな感じの人なんだろなーつて思ってたらなんだよ！ 犬も飼ってくれねえのかよ！ そんな適当なことしてる間に親父は！ 父さんは死んで！。パピ、プーに食われちゃったんだよ！」

長男「……。あ。パピ、プー、もう食べない。もう食べちゃダメ。ほら。ほら」

次男「兄さん」

長男「……。はい」

次男「パピ、プー。兄さんが飼ってくれるよね」

長男「……。はい」

次男「……。ありがとう。それでこそ兄さんだ」

長男「……。」

義兄弟「あ、もしもし。ヒロコ？ アツノリです。アツノリ。え？ 分かった。ちよつと今から向かうわ。分かった。イオンのフードコートね。分かった。はい。はい」

義兄弟「あ、ちよつと娘が熱出したみたいで。ちよつと行ってきますわ」

長男「ミヤビ」

義兄弟「ええ。ミヤビ」

長男「・・・お大事にね。気を付けて」
義兄弟「ありがとうございます。では」

善兄弟揃ける。

長男「・・・」

次男「めんね。兄さん。こんなと言いつもり無かったんだけど」

長男「いや、別にいいよ」

次男「・・・めん。頭冷やしてくる」

次男拗げる。

長男「・・・めんな。親父」

長男「・・・就職するかあ。犬の飯代稼がなきゃいけないし」

長男「おー、よしよしよしよしよし。可愛いな。お前家に来るとなったから。ここより狭いかもしれないけど。頑張って散歩とか行くから。よろしくな」

犬をめでている。

次男が戻って来る。

次男「兄さん！ 兄さん！」

長男「どうした？」

次男「父さんの部屋から、ほら。豊丸のセクシービデオ・・・」

長男「・・・父さん」

素敵な言葉が流れて暗転。

終わり。